

## 仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑧

### 道安の翻訳観

インドと中国という異質の思想交渉である漢訳は、二言語間の相違や表音文字から表意文字への変換という言語的制約、さらに様々な經典がランダムに将来されるという特殊な状況が、多くの混乱を生み出す要因となっていた。そのような状況で道安は漢訳に際して留意すべき点を整理し、経序において持論を提示した。中でも「摩訶鉢羅若波羅蜜經抄序」『出三蔵記集卷八』に記された「五失本三不易」から彼の翻訳観が理解できる。

五失本とは、翻訳上、原義を失うことが不可避であると判断される五つの項目を意味する。

第一には翻訳すれば語の配列順序に於て、胡文と訳文とが互に逆になること。第二は胡経は質朴を旨とするが、秦人は文を好むから、訳すれば本の質を失う。第三には胡経には反覆が多いが、翻訳の際には裁斥される。第四には胡経には同じ内容を重ねて別な語によって表現したため一見混乱と思われるような場合があるけれども、それが大量に削除される。第五には胡経は段落の改まる毎に既述の事項を繰り返すが、翻訳の時には悉く此が除かれる。(横超, 1983:8)

道安はこれらの五項目について、漢訳に際して必然的に原文の形式を失うものであると示している。これらに限っては、本意ではないが漢人のためには容認するというのが彼の主張である。

インド諸語から漢訳する場合、語順はどうしても変化してしまう。これは言語的な相違から致し方ない点である。次に、原文は質朴であるが、漢人は文雅を好む傾向があり、訳文に文飾が多用されるとその質朴さが失われてしまう。漢人が文雅を重要視するがゆえに、原文の質朴さは、經典の価値を貶めてしまうという危惧が背景にあると思われる。さらに、原文では、釈迦や菩薩への讃嘆のために同じ表現が何度も繰り返されているが、反復を嫌う漢人の趣向を考慮し、意味的に問題がない部分は省略される。インド諸語の宗教文献の特徴として、反復の多用がみられる。これは口述を基本とする教理伝達の伝統と、語音や声そのものに依拠した神秘的靈力の再現性とその信仰が影響していると思われるが、反復の多用は漢人には好まれず、恣意的に削除されたようだ。このような傾向は第四、第五の項目にも共通している。

次に道安は「三不易」についても指摘している。これに関して、「三不易」と読み、容易ではない三点という解釈と、「三不易」と読み、改易してはいけない三点という解釈があり、研究者によって判断が分かれているが、ここでは横超慧日の論述をもとに「三不易」として道安の翻訳観に注目したい。

第一は、般若経は仏が説かれたもので、聖者は必ず時を顧慮して説かれているから、時代につれて習俗が変わったからといって古の雅古に立って説かれたものを今風に変えるということは相成らぬ。第二には聖人と凡人とはとうてい及び得ぬ隔りを持つものであるから、上古の微妙な教を末世の今に合わせるというような勝手なことは許されぬ。第三には釈尊を隔つこと間もない仏弟子の阿難や迦葉でさえも結集に際して少しの過もないようにと兢兢として謹慎の中に事に当った。然るに仏を去ること千年の今、生死人の凡愚である人どもが平然として經典に取捨を加えるとしたならば、無法無礼言語道断だという。(横超, 1983:9-10)

この解釈に基づくと、道安の翻訳観は、原文への敬虔なる忠実さ

と求道心を重要視し、「三不易」として意識的態度を厳しく批判しつつも、上述の「五失本」ではある程度の変容を容認していたように見受けられる。

道安以前には、漢訳の文体に関して漢語の品格や読みやすさを重要視し、文飾を多用して反復を削除する「文」派と、質朴で実直な逐語訳の直訳を心掛ける「質」派の間でさかんに論争が行われていた(横超, 1958:219-236)。そのような議論によって翻訳そのものに関する論理が醸成されていった。

質派は、原典の本意を忠実かつ正確に伝える事に専念するので、文飾などは一切不要で、質実な文体を用いた翻訳といえる。この場合、原文に忠実であるがために音写語を多用しすぎて文意が全く通じないことや、直訳により原文の意味が通らない箇所は訳出されず、そのまま抜け落ちてしまうこともあったようだ。当時の漢人にとって質派の訳文は原文重視が故に難解かつ読みにくい訳文であったと思われる。

これに対し文派は、雅文を多用し、ある程度の文飾を用いて格調ある達意的な文体を心掛け、意識を容認する姿勢をとる。中国では特に雅文を好む性格上、後者の文派の翻訳が広く用いられるようになった。この文派の洗練された訳文により、漢人の好みに適した仏典が社会に広く認められるようになり、文意も通じるようになったが、教理的見地からは原文に対する忠実さが欠けた翻訳であり、教理の変容につながった。

このような翻訳観の対立は、インド諸語の原文の語彙を意識するのか、音写して音訳するのかという判断基準にも関係していたと考えられる。例えば、Buddhaを「覚者」と訳するのが意識であり、「佛陀」とするのが音訳である。表意文字を有する漢語の場合、「覚者」の訳語からその語意が容易に理解できる。しかし、音写語の「佛陀」の場合、原語の音には近いが、その意味概念の伝達は至難であり、感覚的かつ情緒的な理解にとどまるため、解釈の補完が必要となる。当然ながら文質彬彬、つまり原文に忠実で、なおかつその意味が明確に伝達できる翻訳が理想であるが、実際の翻訳場面においてその両立は困難を極める。あくまでも原文への忠実さを踏襲し、多少読みにくくても直訳を施すのか、原文からは多少遠ざかったとしても全体的に文意が通る意識を施すのか、文質論争においては実際の翻訳論が二極化していたことがわかる。

そのような状況を前に、道安は愚直な直訳を斥け、文派を容認する翻訳観として「五失本」を提示し、また同時に極端な意識を戒め、原文に忠実な質派の姿勢を支持する翻訳観として「三不易」を記し、その両立を模索する翻訳観を提示したと考えられる。この希望的翻訳観は、それが実現不可能な場面に多く直面する翻訳者にとっては机上論になりかねないが、それによって目指すべき翻訳の境地を明確に意識することも可能となる。

道安は漢訳仏典に精通し、経録をまとめ多くの経序を残した。彼は漢訳の指導的役割を担ったが、実際に翻訳には従事していなかった。翻訳者ではなかったがゆえに、翻訳者が翻訳に没頭するあまり陥ってしまう陥穽を見抜いていたのかもしれない。

[引用文献]

横超慧日『中国佛教の研究 第一』法蔵館、1958年。

横超慧日「仏教經典の漢訳に関する諸問題」『東洋學術研究』22巻 2号通号 105号、1983年、pp.1-12